

三朝温泉病院 リハビリ通信

発行日
令和3年9月14日
Vol 12
発行責任者：山根隆治

在宅リハビリセンター開設にあたって

在宅リハビリセンター管理者

中井 孝志

令和3年6月より介護保険制度下の要介護状態、又は要支援状態にある方に対し適切な訪問リハビリテーションを提供することを目的とした在宅リハビリセンターを開設致しました。

当院ではこれまで訪問看護ステーションから訪問リハビリテーションを提供していましたが、制度上は訪問リハビリテーションではなく、「訪問看護の一環として、看護職員の代わりにリハビリテーションを中心とした訪問看護を提供する」という位置づけでした。

在宅リハビリセンターにおける訪問リハビリテーションは、在宅生活において日常生活の自立と社会参加を目的として提供されるサービスです。病院やリハビリテーション施設への通院が困難な場合、退院・退所後の日常生活に不安がある場合など、主治医により訪問リハビリの必要性が認められた場合にサービスを受けることができます。

【訪問リハビリの内容としては…】

- ・歩行、寝返り、起き上がり、立ち上がりなどの各種基本動作練習
- ・運動機能改善や褥瘡予防のための徒手的介入
- ・食事、排泄、着替えなどの生活動作練習
- ・福祉用具の活用方法
- ・住宅改修のアドバイス
- ・社会参加にむけた実践的練習
- ・ご家族への介助方法指導

と多岐に渡りますが、病院で提供するリハビリと異なり、どのサービスも利用者様が実際に生活する環境下で行うため実践的で、生活に寄り添った目標設定・目標管理を行っていくことができます。



現在の訪問リハビリスタッフは、専従・兼務併せて理学療法士5名、作業療法士2名、言語聴覚士1名とまだまだ小規模でのスタートではありますが、地域包括ケアシステムの一翼を担えることに各スタッフがやりがいと責任を持ち、地域に少しでも貢献できるように今後も努力を重ねていきたいと思っています。

日本海新聞で紹介されました

「評価用スマートフォンアプリ」の開発 岩本祐輝理学療法主任

ここ数年、私は「スマートフォンをリハビリに活用できないか」というテーマでアプリ開発に取り組んでいます。皆さんご存じのようにスマートフォン自体は、通話機能以外にもインターネットを利用したアプリをダウンロードすることで多くのサービスが利用できます。例えば時計・電卓・地図・万歩計・ゲームなどスマートフォン普及前は、これら生活用品は個別に購入する必要がありました。今はスマートフォンを通してアプリとして利用することが出来るようになっていきます。そしてスマートフォン自体が年々搭載されるチップやセンサーの進化から非常に高性能にもなっています。自分自身のアプリ作りもそれらのスマートフォン機能がリハビリに活用できればいいなという思いからアプリ作りが始まっています。これまでには、歩行時の動揺を評価するアプリ「SimpleAcceleration」AR技術を使って姿勢を評価するアプリ「FlexibleRuler」AIを利用したバランス評価アプリ「BEWAJ」のiPhoneアプリをAppStoreで無料リリースしています。ただし開発自体は素人であるため思うような理想のアプリにならず機能的な面や使い勝手など諦めている部分も多々あります。それでも自分の作ったアプリをリハビリ治療の効果判定に使用してくれるスタッフもいますのでありがたいと思っています。

また当院リハビリテーション科には素晴らしいアイデアを持つ多くのスタッフや専門分野で活躍するチームも存在し、彼らのアイデアやアドバイスをもらいながらアプリも更に発展させていきたいと思っています。

いずれ患者さんのサポートや地域の介護予防事業などでお役に立てるアプリに発展すればという思いで臨床の傍ら細々と作成やバージョンアップを続けていきたいと思っています。

最後にアプリ作りに必要なスマートフォンやパソコンなど必要に応じて更新させてくれる理解ある家族に感謝したいと思います。



（25） 掲載 2021年（令和3年）8月26日 木曜日

転倒予防アプリ開発

三朝温泉病院の理学療法士
バランス評価、リハビリ活用

三朝市山田の朝霧病院。同院の理学療法士岩本祐輝（みよたけ）さん（左）は、スマートフォンで撮影した歩行動画を解析する「SimpleAcceleration」アプリを開発し、患者さんの歩行姿勢をリアルタイムでモニタリングする。このアプリは、歩行時の重心移動や足踏みの強さを検知し、転倒リスクを評価する。また、歩行時の姿勢をリアルタイムでモニタリングし、適切なアドバイスを行う。このアプリは、患者さんの歩行姿勢をリアルタイムでモニタリングし、適切なアドバイスを行う。このアプリは、患者さんの歩行姿勢をリアルタイムでモニタリングし、適切なアドバイスを行う。

令和3年8月26日
実際に日本海新聞
に掲載された記事

第7回 科内学術大会開催

科内学術委員 作業療法士 松本周三

去る8月18日にリハビリテーション科学術発表会を開催することができました。ご協力いただいたすべての方へこの場をお借りして御礼申し上げます。

さて、この学術発表会も今回で7回目を迎えました。毎回、何かしら「狙い」を持って企画しています。今回は初となる外部講師による特別講演を企画しました。ここではその企画の「狙い」について記したいと思います。

「狙い」それは「自分たちがやっている退院支援を振り返ること」です。入院される方は必ず退院を迎えます。その形は様々で、退院に向けた支援も必要の有無の判別から始まり必要な場合はその濃度も様々で個別性のある関わりとなり、まさに千差万別です。しかし、私たちはその個別性のある千差万別な退院支援を意識して行っているのでしょうか？その上でどこまで専門的な立場で入院患者さんに関わることができていたのでしょうか？この点に疑問を感じたところから、今回の企画が始まりました。

また、この学術発表会をはじめた当初の狙いである「目の前の患者さんへより良いものを還元していく」という点について立ち返ろうとも思いました。当科のスタッフは自己研鑽に励み、研修参加等で治療手段の技術向上を図り、研修参加や研究・事例報告などを学会発表し学術活動に励んでいます。ただその励んだ成果が目の前の患者さんへ還元できているのだろうか？と疑問を感じました。そもそも何を以って還元できたと考えるのでしょうか。いろいろな捉え方はあると思いますが、私個人としては、患者さんの暮らし（退院支援の結果）に現れてくると思っています。

2000年に学術誌「作業療法」で「入院中は家庭復帰に目標を抱いていたが、自室を座敷牢と呼び自殺した症例」が紹介されました。この論文は当時のみならず、今でも衝撃を与えるものです。ここから感じ取れる部分の1つは、“その人の暮らしを意識した支援”ができたのかどうか、だと思えます。その方々の暮らしをどこまで意識して、各個人が専門的立場から関わりをできたのか、支援チームとして関わりができたのか。そういったことを回顧する機会を与えてくれる論文と感じます。

少し話が逸れたので戻しますが、特別講演では、藤井政雄記念病院訪問リハビリテーションの理学療法士北井氏に、同地域に在る施設のものの方の見方の違い、得意分野の違いを示しつつ、退院支援についてお話を頂きました。今回の機会が、当科スタッフが自己回顧するきっかけとなり、自分の臨床への糧になっていくことを期待しています。そして、少しでも多くの患者さんへ還元できることを願っています。

学術委員会としては今後も「狙い」を持った企画を打ち立てていきたいと思っています。

第7回科内学術大会演題

- ① なぜ個別運動浴を実施するのか
- ② 実用性のある歩行手段とは
- ③ インソール補高の実際と効果
- ④ 本人と周囲の思いが乖離し、目標設定と共有に難渋した慢性心不全の一症例
- ⑤ ≧ × リハビリ

松本 厚一	理学療法士
長田 きらり	理学療法士
別所 大樹	理学療法主任
井尾 政美	作業療法主任
岩本 祐輝	理学療法主任

【特別講演】

『生活に即した個別性の高い
リハビリテーションを提供
するために当院リハ科・
訪問リハで心掛けていること』

社会医療法人仁厚会

藤井政雄記念病院

訪問リハビリテーション

理学療法士 北井 玄 氏



科内学術大会での演題発表を振り返って

長田 きらり

今回、「実用性のある歩行手段とは？」というテーマで発表させていただきました。患者さんの退院にあたり歩行手段の獲得は大きなテーマであると同時に、その人にとって退院後実用的なものに成り得るかどうかが判断する上で評価は欠かせません。今回の発表では、実用性の概念とは何か改めて考える機会となり、単に身体機能面・能力面による判断ではなく、家屋環境や背景などセラピスト一人ひとり違った視点を持っていることも確認でき、評価の幅を広げることが出来ました。また抄録やパワーポイントで自分の考えを上手くまとめられるかどうか不安でしたが、先輩方からアドバイスをいただき無事発表を終えることが出来ました。お世話になった先輩方に感謝しています。人前で話すことが苦手で当初あまり乗り気ではなかった私ですが、普段考えていることや、臨床での悩みなどを形にして発表していくことの重要性にも気づくことが出来た、この科内学術大会の経験を踏まえ今後県学会等でも発表していきたいと思えました。

<編集後記> コロナとの共存生活も2年目を迎えていますが、相変わらず多くのイベントや研修などが中止となり、何か物足りない日々が続いています。当科としては6月から在宅リハビリセンターを開設し、今のところ順調な船出となっていることに安堵しています。また8月には7回目となる科内学術大会も開催いたしました。今年は外部講師を招き、当科に欠けている視点を指南いただいたと思っています。まだまだすっきりしない世の中ですが、我々が出来ることは『目の前の患者さんにベストな治療・支援を提供する』これに尽きると思っています。何でも全て世の中のせいにはせず、しっかりと地に足をつけてやるべきことを淡々とやっていく、そんな集団でありたいと思います。《文責:山根》